

飢餓の島からの生還

大分県 武藤 文夫

私は大分県の耶馬溪の近く玖珠町の農家に生まれ、七人兄弟の次男でした。昭和十五（一九四〇）年三月小学校を卒業し、福岡市内を走る電車の車掌に就職致しました。

たまたま昭和十七年三月、母が死亡しましたため人手が足りないので、次男坊の悲しさ、実家に帰り農業の手伝いをするようになりました。

大東亜戦争も日毎に拡大し、十二月には大学生等も繰り上げ卒業で軍隊に召される状況になりつつありました。

青年学校に通っていた長男の兄が海軍への志願申込書を貰って来ましたが、長男の出征は農家の生活に困りますので、次男であります私が志願することになりました。

海軍軍人が不足の時でありましたので運よく合

格致しましたが、喜び勇んで報告する私の言葉に、父は「よかったなあ」と言いながらも複雑な気持ちだったと思います。母が死亡し、人手が足りず福岡から呼び寄せているというのに、私という働き手を軍隊に取られ、さらに五人の子供を育てて行かねばならない父の苦悩は大変だったと思います。しかし若い人達が御国のために続々と出征して行く時に、わが子には行くなどとは言えない苦しみを考えますと、志願してよかったのかどうかと思いましたが、入隊するまではがんばって親孝行することに腹を決めました。そして既に私のすぐ弟は満州開拓義勇軍に入隊して、人手不足に困っている中にも一言も愚痴を言わず、御国のためだと励ます父に感心しました。

これまで連戦連勝だった戦いの様相も、連合軍の反撃で至る所で苦戦模様というニュースを耳にするようになり、二月にはガダルカナル島より撤退ということになり、四月に佐世保海兵団に入団

する私には待ち切れない気持ちでした。

四月一日、我が町から五人が豊後森駅を出発し、佐世保海兵団に向かいました。海兵団での三カ月間の訓練は厳しいものでした。顔を叩かれ尻を叩かれ、口惜し涙を流すことも度々でしたが、志願して来た以上なんのくそと唇を噛みしめ頑張りました。

三カ月の教育訓練も終わり七月には転属命令が出ました。行き先は暗号で「ら九九八四」とありましたが、内容は分かりませんでした。服装が夏服でしたから、さては南方かなあーと判断するかありませんでした。

八月初め呉港まで汽車で移動し、軍艦「扶桑」に乗艦しました。そして一番艦は戦艦「大和」、二番艦は戦艦「長門」、三番艦「扶桑」と、堂々たる陣容で出港しました。この当時はまだ制空権、制海権共に日本軍に有利であったため大した心配もなくカロリン諸島のトラック島に入港しました。

私達はトラック島で別の船に乗り換えてクエゼ

リン島に上陸し、第六潜水艦基地隊に仮入隊を命令されました。ここでは毎日、防空壕掘りや陣地構築等の土方作業に汗を流しました。赤道に近い熱帯の島では暑い中にも潮風やスコールがあり涼しい日も多くありました。当時、ガダルカナル島から日本軍が撤退してから南方諸島の日本軍に対する米軍の空爆が激しくなると聴きました。私達がいた四カ月間には全く空襲は受けませんでした。

十二月十日頃、ミレー島行きの船便があるとのこと、移島準備が発令をされました。十二月十一日夜半、輸送船「巴蘭丸」に乗船出港し、二昼夜の航行でミレー島に到着しました。

この部隊は佐世保第二海兵団で三カ月間訓練を受けた二十歳前後の若々しい若者達でした。途中、敵の攻撃を受けることなく到着したのですが、敵潜水艦の攻撃を受けて、顔面いっぱい包帯を巻いて、目鼻口のみを開けた四人位の兵隊の姿を見ました時は、初めて戦争の悲惨さを肌感じまし

た。上陸してまず目に映ったのは、椰子の林の中に建っている立派な兵舎でした。

ミレー島は、マーシャル群島の中央部に位置する珊瑚礁の島で、周囲約八キロ、海拔三メートルの三角の島で、干潮時には歩いて渡れる二十余の小島があり、本島は狭いながらも重要な軍事基地ときました。

私達若い部隊は百人でしたが、最後の補充だったから大変喜ばれました。これで十二月十四日現在の兵力は陸軍二千五百十九人、海軍（施設部を含め）三千二百三十七人、計五千七百五十六人となりました。

島内には、A、B、Cの三本の滑走路があり、攻撃機が約五十機位配置され、米軍基地への攻撃、米軍機の迎撃、艦船への襲撃に活躍中ときました。

防禦兵器は、一五センチ加農砲四門、一四センチ加農砲四門、一二・七センチ高角砲八門、八セ

ンチ加農砲四門、二五ミリ機関砲七門、一〇ミリ機関砲六門、一〇〇センチ探照灯一基が配備されているとのことでした。それだけに米軍の攻撃目標となり、十二月に入ってから毎日のように空爆を受けているとのことでした。

私は一二・七センチ高角砲の弾丸運びを命ぜられ南陣地の配備を命ぜられました。高角砲一門には砲手四人、観測手二人、砲弾運び三人、信管切り一人と九人が配置されています。

ミレー島が初めて空襲されたのは、十一月五日だったそうです。B 24 九機による初めての空爆経験で、高角砲を発射しましたが、残念ながら敵機的高度八、〇〇〇メートルには届かず残念だったと話していました。

十一月二十四日、マキン島玉砕、翌二十五日、タラワ島玉砕等により、米軍の反撃はミレー島への空爆と艦砲射撃となり、連日のごとく米軍の攻撃を受けたとのことで、私達は早速実戦さながらの訓練が始まりました。

十二月十七日、再びB 24八機が来襲、訓練は実戦となりました。米軍機が投下する爆弾の音が空気を震わせ、その凄まじい音は自分の頭の上に落ちるような恐怖を感じ、「射て！ 射て！」の号令と共に、高角砲が発射されます。そして「そりゃ一発！ そりゃ一発」と重い砲弾を運ぶのに汗びっしょりになりました。この短い時間がどんなに長く感じられたでしょうか……。爆弾は滑走路に落ち大きな穴ができましたが、夜間作業で修復できました。

十二月十九日、米戦爆連合機約二十機来襲、「位置に付け！」で急ぎ掩体の中の高角砲の持場に着く。「射て！ 射て！」で応戦する。発射された弾丸は米軍機の下で炸裂し、その破片がピュンピュン飛んでくる。大砲の音、爆弾の炸裂する音、無我夢中で応戦、米軍機は爆弾を落とすだけ落とすと飛び去って行く。この日も本部地区兵舎が一棟倒壊と零戦が三機炎上したとのことでした。

ほっとする間もなく、十二月二十日、米空爆連合機約三十機の波状空爆です。今回はわが陣地の南砲台の破壊が目的でしょう。ピュンピュンと次々爆弾が破裂するその轟音の凄まじさ。それこそ必死で弾丸を運び一機でも撃ち落とさねばと一生懸命でした。爆弾一発が近くに落下し、掩体の下にいた戦友二人が「あつ！」と言う間もなく戦死しました。「何と言うことだ」残念でした。幸い私は砲座におりましたので、難を逃れましたが、目の前での悲惨な出来事に戦争の無情さを身に滲みて感じました。

十二月二十一日、米軍戦爆連合機二十機が二回にわたり波状空爆。滑走路、航空隊宿舎の西地区の海岸線陣地に被害があったと報告をきました。十二月二十三日、米軍戦爆連合機約三十機来襲、本部及び望楼地区と、西、南外海岸線に被爆、加えて武器、弾薬、食糧を積載して入港した「南海丸」が発見され、戦車四両と僅かの弾薬を荷揚げしただけで沈没しました。その上に兵士が戦死者

十四人、重傷者七人を出しました。このことは復員後に聞かされたことでしたが、もし当時「南海丸」からすべての食糧品と武器弾薬が荷揚げされていたら、その後の対空対艦戦に充分の応戦ができたであろうし、飢餓に苦しむことなく、多くの兵士が復員できたに違いはないと思います、「南海丸」の沈没は惜しみても余りあるものだったと残念に思いました。

十二月二十四日、米軍機約三十機来襲、南砲台と西砲台地区が爆撃を受けました。二十五日、三十六機。二十七日、B 24 八機。二十八日、B 24 二機とB 25 十機。二十九日、B 24 六機とB 25 三機。三十日、B 25 八機と戦爆連合機十四機が来襲し各所に爆弾を投下して去りました。十二月三十一日、戦爆連合機四十機が来襲、北部地区に投弾、被害甚大でした。

このように毎日が米空軍機来襲で明け暮れたため新年を迎える準備どころではありませんでした。

まさに緊張の連続でした。

昭和十九年一月一日、本日は正月だからと主計課では特別献立の昼食を準備中、米軍戦爆連合機三十二機来襲、餅に砂が入って餅入り雑煮は不能となり、急遽乾パン、ぜんざいを食べ正月を祝しました。正月も休む暇はありません。常夏の島では正月が来ようが揮一枚での正月でした。

十一月三日の初空襲以来の連日の空襲で、島のジャングルも焦土と化し、快適だった宿舎も倒壊し、島全部が変貌し、陣地の中から南十字星を仰ぎ見ることができるようになりました。一月二日から十日間は連日空爆を受けました。そして私達若い兵士は陣地内を走り廻り、被爆後の後始末と迎撃のための準備に多忙な毎日でした。

一月十日、ミレー島在駐の陸、海、空施設の各指揮官が第六十六警備隊本部に集合され、「南海丸」沈没により食糧の見通しがないため残食糧二割を非常用軽食として確保、残余を人員当てに割

り当て保管することが決定されました。食糧の補給があるまで本日より全員が一割の減食が実行されました。主食の定量とは米四合、麦四勺でした。

一月二十五日、双発ノースアメリカン八機が滑走路上空を二次にわたり低空で侵入して来ました。十一時四十分「対空戦闘配置に着け」との号令一斉に砲火が発射されました。両軍の発射弾が空中で交叉し、壮絶な戦闘で、内二機を内海で撃墜し、乗員六人（内一人は死亡）を捕虜にしました。敵機はA滑走路上空を四機横隊二列で侵入し、突然白い物が落下したと思ったら、パーツと落下傘が開きました。

すわ落下傘部隊と思いましたが、それは爆弾でした。一個で八〇キロ位で、三人で恐る恐る滑走路外に運び出し、十五発目を運び終わったころ突然大音響と共に爆発しました。全部で四十八個ありましたが、次々と爆発し残りの不発弾を調査の結果、時限爆弾と判明しました。

時限爆弾に付けられていた落下傘はナイロン製でした。日本の絹製品と違い吸湿性に乏しく、強靱性があるため終戦まで兵士の褌の材料に使用されました。この時捕虜にした米兵士の処遇に対して、復員直後に捕虜虐待で戦犯者を出すことになろうとは誰も気付かなかったと思います。

一月三十日、米軍機P 39が三次にわたり十二機来襲、滑走路に爆弾投下、飛行場が使用不能になりました。

二月四日、昨日に続き米空軍機による爆撃を受けました。この日から主食は二割減食となりました。

二月五日、クエゼリン島玉砕。この報を聴きました時に、僅か四カ月間でしたが、防空壕や陣地作りに汗を流した古兵の方々はどうなったであろうかと、思わず涙を流しました。二月二十五日、この日も米軍機の空襲を受けました。

クエゼリン島玉砕に続き、トラック島空襲に

よりミレー島は、後方を完全に遮断され、飛行機、武器、弾薬は勿論のこと食糧さえも補給は断念せざるを得なくなりました。

弾薬庫の弾薬も少なくなり米機は我が物顔に島中に投弾しました。そして主食も四割減となり、お粥となりました。

二月十一日、呂四十四潜水艦（艦長橋本少佐）は、ミレー島へ食糧等の補給のため、三月二日トラック島を出港し、本日到着、糧食十一トンとその他の物資を陸揚げしてくれました。食糧庫も残量すくなくなつた今日、僅か十一トンでも、島内全員が二十日間生き伸びることのできる大切な量でした。潜水艦のご苦勞に対して感謝せずにはおられませんでした。

三月十八日、日の出と共に来襲した敵機は、四次にわたり延べ三十八機、第一波は滑走路を集中攻撃し、第二波は各砲台を攻撃、第三波は警備隊本部の空襲、戦闘指揮所が至近弾を受け暗号室外壁に亀裂が生じました。十時半頃から艦砲射撃が

始まりました。

米機動艦隊は戦艦五隻、巡洋艦三隻、駆逐艦七隻だったといひます。この時も無我夢中で応戦しましたが、空爆と違い、艦砲射撃はどこから飛んでくるか、わからないので恐怖心がひしひしと迫りました。日没前に砲爆撃も止みましたが、この砲爆撃により、各砲台のリーダーは致命的被害だったと、知らされ不安を感じました。三月二十日、本日から主食は半減になり、いよいよ深刻になってきました。

四月十六日、沈没しました「南海丸」からの物資引揚げが開始されました。また一方、自活のための農園作りが奨励され、手始めとして生鮮食糧品運搬船「虎丸」が持参した種子を蒔くことにしました。南瓜の成長は順調でしたが、爆弾で被害を受け実が熟するまでには至りませんでした。

四月二十九日、天長節、少量でしたが米食と漁労班の活躍により鰯が一人当たり二匹ずつ割り当て

られ、嬉しい食事でした。五月中旬、ミレーアメリバ赤痢が多発しました。薬もない上に体が衰弱しているため死亡者が続出しました。

「南海丸」から引き揚げた米は悪臭を放ち、海水で洗い日光で乾燥したものを粉にしてダンゴ汁にして食べました。栄養はどうであれ空腹を満たすためには大変役に立ちました。

ミレー本島は爆撃により、耕作地を作ることができないので離島分散が決定されました。ミレー環礁は大小二十有余の島でできており、干潮時には陸続きとなるので、兵員を分散し、それぞれの島で農園作りが始められました。

本島は連日の爆撃で椰子の木も折れ、倒されておりませんが、離島には椰子の木も繁茂しており、食糧の足しにもなると判断されての処置でした。島の大きさに応じて兵数も割り当てられました。

六月十二日、伊号第一八四潜水艦が、僅かな食糧と種子類をゴム袋に入れて流してくれました。ゴム袋には、南瓜、西瓜、きゅうり等の種子が入

っていたので、大いに役に立ちました。食事もだんだんお粥から重湯になり、朝食抜き、昼食抜きの夕食だけとなりました。九月からは二分食となり、椰子のコブラを削ったもので汁を作り、それに若干の米を入れてはありましたが、つぎ方次第では米一粒も入らないコブラの汁だけの者もありました。

空腹を少しでも充たそうと、島でとれる動物（ネズミやカラス）、魚、貝類、椰子ガニ、海のカニ、伊勢えび、たこ、椰子の実、パンの実、バナナ、パイヤ、豆の木、朝顔の葉等、食べられるものはなんでもかんでも食べて、飢えをしのぎました。九月頃から餓死する者が続出し、毎月三百人位の死者が出ました。戦闘による戦死者はその一割位でほとんど栄養失調による餓死であったと聞いております。

体力は目を追うごとに衰弱しその上アメリバ赤痢とバラチフス、テング熱が発生し、悲惨な光景でした。私もテング熱に犯され苦しみました。米

軍の空襲の続く中、飢えに苦しむ兵隊は頬はこけ、日焼けした顔は目ばかりぎよるぎよるしてふらふら腰で、戦争どころではありませんでした。

六月十九日、日米海戦の最大のマリアナ沖の日米両艦隊の決戦があり、この海戦で日本海軍が主力を失い、日本敗退を急速に迫る原因ともなつたと聴きました。

七月七日、サイパン島玉砕。八月三日、テナアン島玉砕。八月十一日、グワム島玉砕となり、敗戦に次ぐ、敗戦となりました。

八月二十日、私達の主食は七割減となり、おつゆどころか、水ばかりの状態でした。米軍は南方の島々が玉砕の後、ミレー島に目標を向け毎日一〇〇機から一五〇機の編隊で来襲、爆撃し、すべての施設は破壊され、レーダーも使用不能となりました。戦死者、負傷者も多数出て被害甚大、惨憺たる状況は口で言えるものではありませんでした。せつかくの自作農園も南瓜の収穫はありませんでしたが、ほとんど破壊され食べることはできませ

ん。

第二次、第三次と離島分散が実施され、本島は三百人位の人員となり、これで戦争ができる訳がありません。

九月二十日、メジユロ島司令官グロー大佐から、ミレー島司令に対し降伏のビラが散布されましたが、志賀司令は拒否されたそうです。毎日の爆撃により地上の建物はほとんど破壊され、昼尚暗しと言われたジャングルも昔日の面影はなく、折れた椰子の木、パンの木が所々に残り、卒塔婆の並んでいるような姿でした。そのため飲料水にも事欠き、兵舎は吹き飛ばされて、各班ごとの小規模の小屋で生活せねばならなくなりました。

島に上陸した頃は、軍服も第一種、第二種、第三種に防暑服も持参しておりましたが、みんな爆撃で失い、禪一つでの明け暮れとなりました。

九月二十五日、米軍機が二次にわたり、延べ八十六機の空爆があり、各砲台の対空、対艦、兵器

も使用不能になった上に、本部の食糧庫も破壊され、主食も八割減食となりました。

十月二十九日は、主食四合四勺が九割減食となり、いよいよ重湯食事になりました。十一月九日、非常用食糧を除き食糧は皆無となり、本日以降完全に零食となり、なりふりかまわず食べられる物は食べる始末でした。戦友達も餓死する位なら、一層爆死した方が楽だと言う者もおりました。

目の前で戦友の餓死して行く姿を見て、次は自分かなと何回思ったことでしょう。一番若い者が弱気を出しては申し訳ない、何としても祖国に帰るまでは生きねばと、細くなった足と腕をなでながら思い返しました。そして毎日定期便のように襲う米軍機を睨みながら、使用不能になった高角砲に紐がったかわかりません。飢餓との戦い、米軍との戦い、空腹で動けないわが身が悲しくなりました。

空爆に明け暮れた昭和十九年が終わり、昭和二十

十年一月一日、正月用にと、毎夜夢にまで見た麦飯が、食器八分位と副食には大豆とサバの缶詰の煮込みが配給され、みんな子供のように喜び食べました。昨年十一月九日以来米飯を口にしたのは初めてのことでした。それだけにこの間、体が衰弱し、栄養失調で死亡者が続出しました。

昭和十九年十一月から同二十年一月までの二カ月で、戦死者総数の四割をしめ、この二カ月間がいかに苦しい時期であったかを物語っています。

農園作業も体の衰弱で思うようにならず、米軍の爆撃は熾烈を極め、夢に見るのは食べ物の夢ばかりでした。海での魚も重要な食糧でしたが、毒魚とも知らず、一月二十三日、食べた魚で集団中毒事件が発生しました。

四月になると、米軍の救助船（アドワク船）の活躍が日増しに活発になり、島に近づいては、空腹に辛抱し切れずに逃げる島民の軍属と兵士を連れ去ることも度々あったとも聴きました。敵前逃亡は銃殺と知りながらも逃亡する人達の気持もわ

かるような気がします。

七月七日、米軍メジロ島司令官より降伏勧告書が飛行機から投下されましたが、志賀司令は再び拒否されたそうです。

七月二十二日、六月初旬以降静かになっていた米軍機は二十日、二十一日、二十二日、と連日來襲し、烹炊所と主計科倉庫が大被害を受け、本部指揮所、暗号室側にも直撃弾を受け、暗号員三人が戦死、重軽傷者四人を出しました。

八月十三日、ノースアメリカン機九機が來襲、電信所一帯が集中攻撃を受けましたが、電信室の送受信には支障がないときました。

天皇陛下の玉音放送により「本日以降の連合軍に対する戦闘行為を停止せよ」と。電文を受領されたようですが、私達に知らされたのは八月十七日でした。昭和十八年十二月十四日以降、一年九カ月間、死闘の連続でした。ある人は爆弾で、ある人は砲弾で、ある人は病気で、ある人は栄養失

調で、祖国の勝利を信じながら散華されました。その数三千人余ときき驚き、悲しみました。

八月十七日、米軍機より通信筒が投下され、「八月十五日無条件降伏を表明された。降伏の意志があれば、滑走路に白十字を描け」との意味であったそうです。

八月十八日、志賀司令は「本日からすべての軍事行動を停止せよ」との命令を発せられました。

「ああ戦争は終わった」と、皆がっかりしながら、今後どうなるのか不安いっぱいでした。戦争は終わったが、食糧戦は終わっていない。

八月二十五日、武装解除、残り少ない武器弾薬を栈橋の所に積み重ねました。命を守ってくれたこの銃をと撫でながら積み重ね、米軍の立会いの下に無念の涙を流しながら海中に投棄しました。

八月二十八日、米軍は食糧が欠乏していることを知り、主食と副食を補給してくれ、夕食から一人当たり五勺のお粥が配給されました。固い御飯

を急いで食べると、胃に異常を来たすためお粥にされたと聞きました。本日から非常食と併せて米軍の補給食、一人当たり二合の主食が配給されました。昨年の十一月九日から十カ月、正月一日を除き米を口にしていなかったので嬉しい限りでした。

九月八日、ミレー環礁において散華されました三千余柱の英霊に対し、終戦の報告と慰霊のため、A滑走路内海寄りで全軍による合同慰霊祭が行われました。急造の白木の祭壇には、久しく目にしなかつた銀飯が二盛供えられ、南瓜と椰子の実が積まれ、二年余の爆撃のため皆無だった花に代わり南瓜の雄花、雌花が左右に飾られ、ローソク代わりに椰子の油の灯油が灯されて、読経のない慰霊祭でした。

九月十三日、復員船「氷川丸」が二十八日入港するとの電信があり、「病人を優先し、生存者の二分の一は乗船できるが、残員は別船入港まで待機

せよ」とのことと聴き、不安になってきました。志賀司令はこの電文に立腹されたと聴きました。直ちに全員が乗船できるように配慮せよと副長に命ぜられたとのことでした。

九月十五日、「氷川丸」はミレー島に向けて本日舞鶴港を出港するとの受電がありました。全員乗船できるかどうかまだ不明であると聞き、不安な気持ちでした。

九月二十日、ミレー島本島では、離島からの引揚者の受入れ準備に多忙でしたが、隊員一同の表情も明るく作業も思いもよらぬ早さで完了しました。一方本日から量は少ないが普通食となりましたので、皆子供のように喜びました。

九月二十三日、陸海軍の下士官、兵はA滑走路に集合させられました。完全武装した米兵が、我々が整列している前を島民二人を付き添って大声で話しながら通りました。いわゆる捕虜殺害犯人調査のための面通しでした。

九月二十五日、志賀司令以下四人がMPに付き

添われ飛行艇に乗り込まれたとのことでした。その間、志賀司令は副長に「氷川丸」からの連絡はないか「氷川丸」が入港したら全員を無理であっても乗船させてくれ、くれぐれも頼むと指示されたそうです。各島からの生存者は全員集合完了しました。

九月二十六日、昨日に引き続き戦犯容疑者として、陸軍四人、海軍四人計八人の方がメジロ島へ出発されたとのことでした。「氷川丸」入港直前のまことに気の毒に堪えない出来事でした。

九月二十七日、「氷川丸」から全員乗船する準備をせよとの連絡でした。

九月二十八日、朝食の後各隊担当地域の清掃を行い、島民が帰島してもいつでも使用できるよう、使用できる物は整然と並べました。「氷川丸」は午前五時頃、高岩水道から入港して来ました。白い船体に赤十字のマークも鮮やかにかつて「南海丸」の沈没した付近に投錨しました。

乗船できないは別問題として、嬉しさの

余り涙がはらはらと流れました。約一時半位して全員乗船できるとの報に皆飛び上がって喜びました。乗船開始と共に栈橋から「氷川丸」までは米軍の内火艇でした。十二時二十分、遺骨を抱いた戦友がまず乗船し、次に傷病者、十五時四十分頃全員が乗船できました。

生存者は陸軍九百九十一人、海軍（施設隊六百二人を含む）千五百九十九人、合計二千五百九十人で、昭和十八年十二月十四日（私達が上陸した日）現在の総員は五千七百五十六人で、陸軍二千五百十九人、海軍三千二百三十七人でしたから、戦死者（行方不明者も含む）は三千百五十四人でした。

夕食は船内で「氷川丸」乗組員の心尽くしでありましょう、頭付の煮魚と味噌汁に「ぶどう」「なし」がつけてあり、何年ぶりの日本食でした。勿体無い、有難い、かつて空腹時に夢にまで見た献立に合掌して箸を取りました。涙の出るような

おいしきでした。栄養失調で散華した戦友達にも、一口でも食べさせたかったと思うと涙が流れ、止めることができませんでした。

夕食後甲板では離島分散で、離ればなれになつていた戦友同志が生きていた喜びを語り合い、握手している姿があちこちに見られました。船上から見るミレー島、パンの木、椰子の木のまるで卒塔婆のような林立、激戦の跡がありありと望めました。滑走路の向こうの海に太陽がまさに水平線の彼方に沈まんとする、ミレー島における最後に見る落日でした。

九月二十九日、朝食後八時出港、ミレー島に別れを告げるため甲板に駆け上がりました。甲板上には多くの隊員が座して合掌しておりました。三千余柱が眠られるミレー環礁に最後のお別れを致しました。爆撃がなくなつたからでしょう浜千島が、船の周りを群れ飛び、私達を送ってくれているようでした。

その夜船内で、志賀司令がメジュロ島にて、二

十八日自決されたことを聴き、惜しい人を失つたと残念に思いました。高潔で崇高な人格者であり、部下を大切にされた方と聴いておりました。

死を覚悟されながら全員を乗船させてくれと副長に指示された温情に、私達一同ご冥福をお祈りしました。

毎日船内では内地も食糧事情が厳しいと聴き、自分達が経験した生活を内地で活用しようと、種々の方法を話し合いました。

十月七日、午後二時浦賀港に入港しました。美しい富士山の姿を見ました時に、間違いなく祖国日本に帰つたのだと実感しました。さすがに初秋。吹く風が冷たく感じました。支給された長袖。長ズボンを着用しました。

十月八日、朝食後上陸開始、祖国の土を一步一步踏み締め、よろよろしつつも嬉しかった。ほんとうに嬉しかった。両側には婦人会の方々が「ご苦労様でした。お帰りなさい」の声を聴き、ポロ

ポロと涙が溢れ、私は亡き母を思い出しました。

宿舎は横須賀市久里浜の海軍工作学校でした。

病人は、海軍関係者は野比海軍病院に入院。陸軍関係者は、横須賀陸軍病院へ入院されました。

十月十二日、復員開始。二年六カ月労苦を共にした戦友との別れです。苦しみも分かち合った戦友と手を取り合い、東に西にと別れを惜しみつつ旅立ちました。混み合う列車に飛び乗り故郷に帰ったのは、十月十三日でした。

豊後森駅から自宅へ、六十キロあった体重が三十八キロに減少し、心だけが急ぎますが体が動きません。自宅へ着くと、父も兄も（台湾で陸軍兵士だったそうです）弟も妹も皆びっくりしながらも、喜んで迎えてくれました。そして仏壇の前で、ご先祖様や母に、無事帰って来たことを報告しました。

二二キロも痩せ細った私の姿に、家族みんながびっくりしました。それでも無事帰ったことに涙を流して喜んでくれました。飢餓の島から脱出し

た喜びは忘れられません。

二度と戦争はしてはならない。あの苦しみ、あの恐怖、戦友よ安らかにお眠り下さいと祈りながら毎日を過ごしております。